

読み聞かせを楽しもう

第三研修室 研究主任
後 藤 千和子

もう12年も前のことになってしまったが、まぶたに焼き付いて離れない光景がある。3歳の女の子が、動物の縫いぐるみたちに絵本の読み聞かせをしている場面である。

その夏、私は、アメリカ合衆国オレゴン州ポートランドで、約3週間、ホームステイをする機会を得た。ホストファミリーの一人娘コリーは、ほとんど毎日、縫いぐるみを十二、三個自分の前に円く並べては読み聞かせをして遊んでいた。読み聞かせといっても、実際は絵本を読んでいたのではなく、聞き覚えたお話をそらんじていたのである。きっと幼稚園で先生に絵本を読んでもらったときの様子を思い出しながら、まねをしていたのであろう。まだ文字を読めないコリーが幼稚園の先生になりきって、楽しそうに縫いぐるみたちに読み聞かせをしている姿に、私は深く感動した。

今また、読み聞かせの重要性が見直されている。新しい『小学校学習指導要領』国語科の[第1学年及び第2学年]の「3内容の取扱い」で、「読むこと」の言語活動例として「昔話や童話などの読み聞かせを聞くこと」、「絵や写真などを見て想像を膨らませながら読むこと」、「自分の読みたい本を探して読むこと」が挙げられているが、この一連の読書活動は、高学年の読書発表会へ発展すべきものである。

愛知県岡崎市の根石小学校では、24年間読み聞かせを続けている。特定の教科に偏らない、作品は担任に任せるという方針の下、1回20分間の読み聞かせの時間を4回、1単位時間の特設時間を1回、毎週設けている。これまで、読み聞かせは読書生活の中で受け身の姿勢をつくってしまうのではないかと、低学年から高学年へと読書指導の質的な展開を設けるべきではないかといった反省が繰り返されてきたが、「1日に20分間でも子どもたちと楽しい絵本の世界に浸る時間を用意しよう」という初心に帰ったそうである。

今更言うまでもないが、鹿児島県には40年ほど前に椋鳩十先生が提唱され始まった「親子20分間読書運動」がある。今後、この家庭における読書運動も大切に継承しながら、学校教育の中で国語科を中心にいろいろな場で、読み聞かせを更に充実させていく必要がある。

子どもたちは、読み手の声を聞きながら、言葉を受け止め、それぞれにイメージを広げていく。読み聞かせを継続することによって、子どもたちの豊かな心をはぐくみ、想像力や創造力を培うことも期待できる。「子どもたちに読んでやりたい、聞かせたい。」と思う本を見付け、教師自らも楽しみながら読み聞かせを实践したいものである。